

あきらめない

「強い心」をもつ

ために

池江美由紀

はじめに

トンビでもタカの子育てを真似ればタカに育つ

「将来、自分のなりたいたいものをイメージして、見えたものを絵に描いてみよう」

私は、経営する幼児教室の小学生のクラスで、こういう課題を出します。

自分の未来の姿を具体的に想像し、表現する。子どもの能力を引き出すために、とても大切な取り組みです。

私は結婚して3人の子を授かりました。上から長女、長男、そして3番目の次女が璃花子です。璃花子が小学校に上がるころに離婚してひとり親になったので、3人の子を1人で育ててきました。幼児教室を経営していたため、子どもたちは学校が終わると私の教室に寄って、ほかの生徒さんたちと一緒にレッスンを受けたり、遊んだり



していました。

そのとき、この「**将来、自分のなりたいたいものをイメージして、見えたものを絵に描いてみよう**」という課題にわが子も取り組むと、次女の璃花子は、色鉛筆でいつもこんな絵を描きました。これは小学3年生のころの絵です。

表彰台があつて、3人の女の子がのっています。真ん中の「1」と描いてある表彰台にいる女の子の首には金メダルがかかっています。横に「りかこ」とあります。2番と3番の表彰台にいるのは、ペルー人とインド人。水泳のコーチが遠くから見守っています。

絵の横には「オリンピックでゆうしょうした!」という文字。「オリンピック」という言葉を、「お母さん」や「お蕎麦」のように、「リンピック」にしていけないな「お」をつけた「オリンピック」だと思っていたようで、おもしろい。

子どもが一心に、そのとき自分がイメージして見えたことを一気に描きあげたものだということがわかります。この課題を与えると、娘はいつも表彰台の真ん中で、金メダルをかけている自分を描きました。



「将来、自分のなりたいたいものをイメージして、見えたものを絵に描いてみよう」という課題に、次女の璃花子が描いた絵。首に金メダルをかけて表彰台の真ん中に立っている娘がいます。

(東京ドルフィンクラブの清水桂コーチ提供)



私自身、決して恵まれた環境で育ったわけではありません。子どものころの私は、将来の夢もなく、打ち込めるものもなく、学校を卒業して公務員になりました。周囲は、安定したいいい職につけたね、と言ってくれましたが、私は自分のやっていることにやりがいを見つけれず、自分にはいったい何ができるのだろう、といつも思っていました。

そうした日々のなか結婚し、仕事を辞めました。

子どもをほしいと思ってからは、さまざまな本を読み、これはと思う人に会いに行き、出産や育児の勉強をしました。その熱は、長女を妊娠するとますます強くなり、長女を出産した翌年に幼児教室を開きました。それから約30年にわたって、講師兼経営者として働いています。

冒頭の「**トンビでもタカの子育てを真似ればタカに育つ**」とは、このとき学んだことです。子どもにどんどん知識を詰め込み、早くから周りと差をつけるような教育ママ的な考えではなく、**どんな親から生まれた子でも、適切な刺激や環境を与えれば、優秀に育つことができる**という事実に感銘を受けました。

子育てのなかで、縁あって長女、長男がスイミングクラブに通いはじめ、楽しそうに泳ぐ姿を見て、璃花子も水泳をやりたい、とスイミングクラブに通うことになりました。私から、「水泳をしなさい」とか「速いタイムで泳ぎなさい」などと一度も言ったことはありません。

私が大切にしていたかったのは、「どんなことでも、そのなかで一生懸命努力すること」「強い心をもつこと」「最後まで投げださずにやり遂げること」「仲間を大切にしながら切磋琢磨せつさくますること」などです。「人間力」を身につけられればよい、と思っていました。

そのために、私が実践してきたことは本書で詳しく述べていきます。当たり前のことですが、親や大人は、いつまでも子どもの面倒を見ることはできません。子どもはいずれ大人になり、自分で考えて自分の道を選び、歩んでいかなければなりません。

自分で思い描いた人生を、幸せに生き抜いてほしい。あるいはもしかしたら、自分が選んだ道で転ぶこともあるかもしれない。けれど、転んだことで学ぶこともあるかもしれない。大切なのは、自分の力で立ち上がり、再び歩みだす。そんな人になるた



めの力をつける、ということだと思います。

おかげさまで、長女と長男は大学を卒業し、自分のやりたい道で社会人になりました。大学を卒業する22歳までが子育て、と決めていた私が、末っ子の璃花子の子育てもあと少しで終わる、と思っていたとき、その日は突然やってきました。

2019年2月、璃花子は「白血病」と診断されました。そして、病と闘い抜き、再びプールで泳ぐことができるようになりました。練習に励み、努力を重ねた娘は、2021年4月4日、コロナ禍で1年延期になった東京2020オリンピックの選考会で代表権を勝ち取りました。選手として2021年の東京オリンピックに出場することが決まり、リレーの代表として泳ぎました。

4月のレース直後のインタビューで璃花子が言った言葉、「何番でも、ここにいることに幸せを感じようと思った。仲間たちが全力で送り出してくれて、とても幸せ。本当にうれしかった。言葉にはできない」。

娘が元気でいてくれること、そして、大好きな水泳を再びすることができること、

私も本当に幸せです。

小学3年生で璃花子が描いた「おリンピックでゆうしょうした！」。

その絵のようになるかどうかは、これから先もわかりません。でも、私は、娘が描いたその夢を叶えられるように応援していきたいと思います。そして、何より、娘が大好きな水泳をずっとつづけていられますようにと願うばかりです。

3人の子どもたちと教室の子どもたちに私なりに伝えてきた、「**どんなことがあっても、最後まであきらめないで努力する人になる**」。娘はそんな人に育ってくれたようです。

本書では、私自身が学んできたこと、大切にしてきたこと、3人の子育てや幼児教室で実践してきたことなどを1冊に書かせていただきました。子育て真っただなかの方、これから子育てを始められる方、そして、子育てを終えられた方、学生さんやビジネスマン、若い部下をもつマネジメントの皆さんなど、社会で働く大人の方々にも、何か1つでも生きるヒントになることがありましたら幸いです。

ただ、私は何がなんでもあきらめずにがんばろう、と言っているわけではありません。もし、いじめを受けていたり、そこでがんばっても自分自身がすり減って傷ついてしまうような状況なら、思い切って環境を変えたり、勇気をもって逃げたりすることも大切だと、たくさんの子どもたちを見てきて思います。

あきらめずにやることで、将来、幸せになったり、自分が成長できたりする場所なら、思いっきりあきらめないで「強い心」をもってがんばってほしいと思います。

それぞれの方が、それぞれの立場で、役に立つと思うところを見つけていただけましたら、これ以上うれしいことはありません。

何歳になっても、人は変われます。強い心をもって、あきらめずに努力する人になる道はきつと開けていると、信じています。そのことを、私はわが子やたくさんの生徒さんから教えられました。

池江美由紀